

ジャックと生きる木

READIED:NAK

・「READIED」

Ready (準備) の過去形 (多分造語やで)

「既に準備が出来ている」という意味になる (と勝手に解釈しとるや)

今回もまた急転直下なレベルで急展開な物語です。

どうか落ち着いてください。

落ち着いたら、ジャックと生きる木を友達とかに宣伝してください。人が増えたらいいんで
すよ!

ジャックと甘い木 READIED:NAK

なつ

1 ～何かしらの存在～

Chapter1 感覚

「で……もう植物科に敵はいないって、俺も思ってたんだけど、世界を半ば牛耳ってる組織が、もしかしたら植物科と戦争を起こすかもしないんだ……」

「おお、やっぱり急展開……」

「その組織の名前は？」

「ROOT。半ば世界を牛耳っているんだ！」

「魔王の時みたいに、条約を結ばせて解決出来ないかな？」

「この物語で戦闘描写とか見たことないから、条約を結べば解決するんじゃないのかなって思う。」

「まあ、そうだよね！　じゃあ、早速ROOTのアジトに行こつか！」

「うんー」

「ここが……アメリカ……！」

「凄いね……同じ地球とは思えないよ！」

街の各所が輝いている。

みんな英語を喋っている。

「で、生きる木？ そのアジトはどこにあるの？」

「えっとね……南アメリカ……」

アジトが「アメリカ」って言つてたから、即ワシントン空港行きのチケット取つたんだけど……まさか南アメリカの方だとは思わなかつた。

「ごめんね、ジャック……ちゃんと言つておけばよかつた！ てへぺろっ」「だから古いつてば……」

飛行機に乗り直して、タクシーで ROOT のアジト近くに行つた。

「これが、ROOT のアジト？」

「そだよー！ 早速正面玄関から入つて、条約を結びに行こっか！」

世界を半ば牛耳つてる組織に正面玄関とかあるんだ……

2 志望の

Chapter1 条約締結の

「で、あるからして……」の条約を結んでいただけですか？」

生きる木が条文を読み上げた。

これで条約が結ばれてハッピーエンドかな？

良かつた。今回の物語は20ページぐらいで終わりかな？

「うん。分かった」

彼はROOTの最高責任者「霞田栄二」と言っていた。

霞田さんは、20代の好青年。見とれちゃうぐらいカッコいい。

「その条約を結ぶには、ここにサインをすれば良いのかい？」

「はい！ まあ、その紙を破れば破棄もできますが……」

この調子なら条約を結んで、ハッピーエンドだな。

「よし、Kasumida eizi へど……」れを……」

そういうて霞田さんはサインを書いて……
紙を破った。

「えっ！？ なんだ！？」

「私たち高貴な組織、ROOT。我々ががこんな条約を結ぶと思つか？」

「今までのは嘘だつたのかー」

今までのって言つても、まだ会つてから10分ぐらじしか経つてないけど……

「我々ROOTは植物科を含む、日本国への宣戦布告をするー」

せ、宣戦布告!?:

えつ、急すぎない!?

「日本国への宣戦布告……ROOT も偉くなつたな……」

生きる木が苦い顔をして言つた。

「生きる木……植物科に戻ろう! もしかしたら、もう攻撃が始まつちやうかもしねー」

「うん……帰ろうか。…………ち、霞田……許さん…………」

Chapter2 防衛

「若つちー、周囲環境は大丈夫?」

「うん。とりあえず、日本に近づいてくる船は片つ端から全部爆発させしゅよ」

植物科のアジトでは、植物科メンバーが忙しそうにしている。

「みんな……」めん!」

「ジャックが謝らないでよー。黙るのは ROOT の奴らなんだから……」

とりあえず、どうにかして ROOT に乗り込んで、ROOT のメンバーを倒したりしないと始まら

ないか？

「でも、まずは攻撃から日本を守るのが先だよ……」

「じゃあ、作戦を練るよ！ まず、ROOTを内部から破壊しなければ、攻撃は止まらない。だから、スペイ作戦を行う！ だから…………ジャックー！」

「はいっ!?」

「ジャックは、スペイとして ROOTに入つてもいい！」

「お、俺が！？」

「俺がスペイとして……あの ROOTに!? バレたら殺されちゃうよ！」

「数々のスペイを見てきていた、あの人人が講師としてスペイ技術を教えてくれるよ！ ね？ 愛美さん！」

愛美が……数々のスペイを見てきた？

「そうだよ！ 管理界で色々な人の人生を見てきてたからね！ 当然スペイの人達も見てきたよ！ 私が講師としてジャック君にスペイ技術を教えてあげるよ！」

確かに、管理界では色々な人の人生を見る事ができる。

それなら、俺にスペイ技術を教えることも全然出来るか…………

「じゃ、よろしくね、愛美！」

「もちろんよ！」

「みんな！ 定例会議始めるよ！」

植物科の皆が会議室に集まる。

「あれから1週間が経つた。それぞれ、今の状況を伝えてください……えっと、まずは僕からだね……」

そう言って生きる木が話し続ける。

「まず、ROOT の動きだけど……今のところ、本部は特に動いてないよ。じゃあ次、苦つち！」
「えつとね、日本に近づいてきてる船を片つ端から爆発させてるよ。で、日本に近づいてきた船は、だいたい 4500 隻だったよ。全部が全部 ROOT の船なのかは分からぬけど……」

「おいおい……全然関係ない船まで爆発させてるんじゃないのか……？」

「次は、僕ね！」

そう言って、ひまわりさんが話し始める。

「ROOT からのサイバー攻撃などは特に確認されてないよ」

「じゃ、次は私たちね！ ジャック君……？ 今までの成果を見せてあげなさい！」

この 1 週間、愛美から特訓を受けてきた。

正直、スパイと関係なかつたような特訓もあつた気がする。

手から糸を出す特訓とか、スパイじゃなくてスパイダーマンじゃん……

「俺はこれから ROOT の面接試験に行つてくる！ 書類選考は無事に合格したんだ！」

「おお！」

そつ。

俺は、偽名で書類を ROOT に出して、審査を待っていた。
そして、書類選考には合格した！

残すは面接試験のみ！

面接試験に合格すれば、ROOT に入れる！

「じゃあ、早速明日行つてくるねー！」

「面接試験、頑張つてね！」

Chapter4 面接

「トト」が面接の控室……

俺は変装して、眼鏡とかもかけて、霞田にバレないようにしている。
控室の中にはざつと 300 人ぐらいがいる。

「はい！ これから面接試験を始めます！ まずは……1 番の、シパクーオ・クジヤクさん…」
俺の偽名だ。自分の名前をほばアナグラムにしただけだ。

「はい！」

「面接会場に入つてきてください…」
うう……緊張するな……

「はい、お座りください……」

「失礼します……」

「では……ROOTへの志望動機を教えてください」

志望動機か……。「スパイとして入って来た」なんて言えないしな……

「えっと……世界を守りたいと思って……」

「分かりました！　じゃあ合格で！」

「えっ？！　早っ！　展開早っ！」

「じゃあ、本日は帰つてもらつて構いませんよ。明日から本部で仕事してもらいますね」
本当に……これでおしまい？

*

「で……よくわかんないけど、合格しちゃった……」

「おお！　すごいじゃん！」

電話口で生きる木の喜ぶ声が聞こえる。

「で、実際に今日からROOT本部で働く」とになつたんだ

「うん、頑張つてね！」

「はーい！」

電話が切れる。

本当に合格しちゃったんだな…………霞田と2人きりで話す機会が出来れば、こっちの勝ちだろうな。

3 ～HQ～

Chapter1 ROOT の活動

「あなたが新入のクジャクさんですね？　まずは、この食べ物が入っているコンテナを東南アジアの拠点に送り届けてください」

「は、はい……」

ROOT って、戦争とかだけじゃなくて、貧困地域への支援とかもやつてるんだな。

ROOT って案外、敵じゃないのかもしれないな。

「で、このコンテナと一緒に東南アジアに行けばいいんですか？」

「ああ、そうだ。明日の朝までだから早く頼むぞ」

この ROOT という組織には、ブラック企業の様で、日々のノルマが相当厳しい。

1ヶ月の間に、食料コンテナ 25 トン分を運ぶか、地域を1つ以上壊滅させるというノルマがある。

まあ当然、地域を壊滅させる事なんて出来ないから、毎月 25 トンもの食料コンテナを各地域

に運んでいる。

*

そうして、かれこれ2年半が経つた。

……ってことは、0.7キロトンも運んだって事なのか。

俺、頑張ったな……

「あ、クジヤク君！ そこにいたのか！ ちょっと話があるから来てくられないか？」

「は、はい！ どうかしましたか？」

『第8会議室』

ここは、第8会議室。

会議室とは言っても6人ぐらいしか入れない。

「クジヤク君の働きを鑑みて、君を専務取締役に任命する！」

せ、専務取締役！？

その役職名って会社じやん！

ここって会社だつたの？！

「わ、私が専務取締役ですか！？ あ、ありがとうございます！」

「2年半もよく頑張ってくれたな。これからは最高責任者の方と協力してROOTを支えてくれた

まえ」

——」
「されば、霞田に近づけるチャンス……？」

「はい。頑張らせていただきます」

ずっと連絡もよこせなかつたが、久しぶりに生きる木に電話をしようか。
霞田と接近できるかもしれないし。

Chapter2 新たな話題

「ジャック！ 2年半も大丈夫だった!?」

「うん。なんなら ROOT の専務取締役になつたよー。」

生きる木は、俺に「新しい作戦を実行する事」を伝えた。
新しい作戦を計画するために、植物科に戻つてきてほしーと仰つていた。
幸い、新しい役職に就いた記念として、1週間の休みをもらつた。
その休みで植物科に戻つた。

「うん。じゃあ今日にでも日本に帰るねー。」「
分かったよ！ ちゃんと準備しておくねー。」

@日本

2年ぶりの日本……………

2年ぶりの植物科……………

2年ぶりの生きる木……………

随分と枝を切つてある。

「おかえり！ ジャック！」

「ただいま！」

「さ、 1週間しか猶予はないんでしょう？ 早速計画を練るよー。」

Chapter3 危ない作戦

久しぶりに植物科に来たが……………

全然内装も外装も変わってないな。

「みんなー！ 会議を始めるよー！」

「じゃあ、ジャック君には、霞田と1対1で話ををして、その隙に刃物とかで脅して欲しいんだけ
ど……出来る？」

今の俺の ROOT での役職だったら、霞田と1対1で会話する事ぐらい出来るはずだ。

「当然！任せてもよー！」

「本当!? じゃあそこら辺の事はジャックに全部頼むけど……良い?」

「って事は、全責任は俺が負うって事か……？」

「俺にそんな大役が出来るだろ? か……？」

「ジャックなら出来るよ!」

愛美が励ましてくれるように俺に言つた。

「愛美……」

「そうだよ! 愛美さんの言う通り、ジャック君なら出来るよー！」

「そうだな。お前ならきっと出来るぜ」

「ひまわりたん……それに薔薇つちまで……！」

「……うん。……俺、やってみるよー！」

「ジャック! 大変だろうけど、頑張つてねー!」

「うん。ありがとう! 俺頑張るねー!」

②成田空港

「成田空港発、ブラジリア国際空港行き、まもなく第3ターミナルからフライトします
あんまりお金ないのに、飛行機ばっかり乗ると、マジでお金無くなるよ……」

「あ、クジャク先輩！　帰つてくるの早かつたですね！」

ク……ジャ……あ、俺の偽名か。

「は、はい。あんまり観光する所もあんまりなかつたんですよ」「クジャク先輩？　私は部下なんですから敬語は使わなくて良いんですよ？」そつか。俺は専務取締役になつたのか。

結構偉い立場になつたんだっけ。

1週間も休むと、忘れちやうな……

紹介し忘れたけど、この人は元上司の神石咲希。かみいしき

ROOT の中で、1番仲良くなつた人だ。

「あ、咲希先輩……ちょっとお願ひしたい事があるんですけど……」

あ、また敬語使つちゃつた。

でも、ずっと敬語を使ってたから、それで慣れている。

「どうしたんですか？　というより……クジャク先輩が敬語使うなら、私も今まで通りタメ口使つて良いですか？」

まあ、俺的にも今まで通りやつてもらう方がありがたい。

「是非そうしてもらいたいです」

「うん。じゃあ今まで通り行くわね！……で、お願ひしたい事って何かしら？」

「実は、霞田さんと1対1で話がしたいんです……」

「!?

「ん？ 凄く驚いた表情をしてるけど……」

「な……何でその名前を……？ ROOTの職員がその名前を知ってるはず……？」

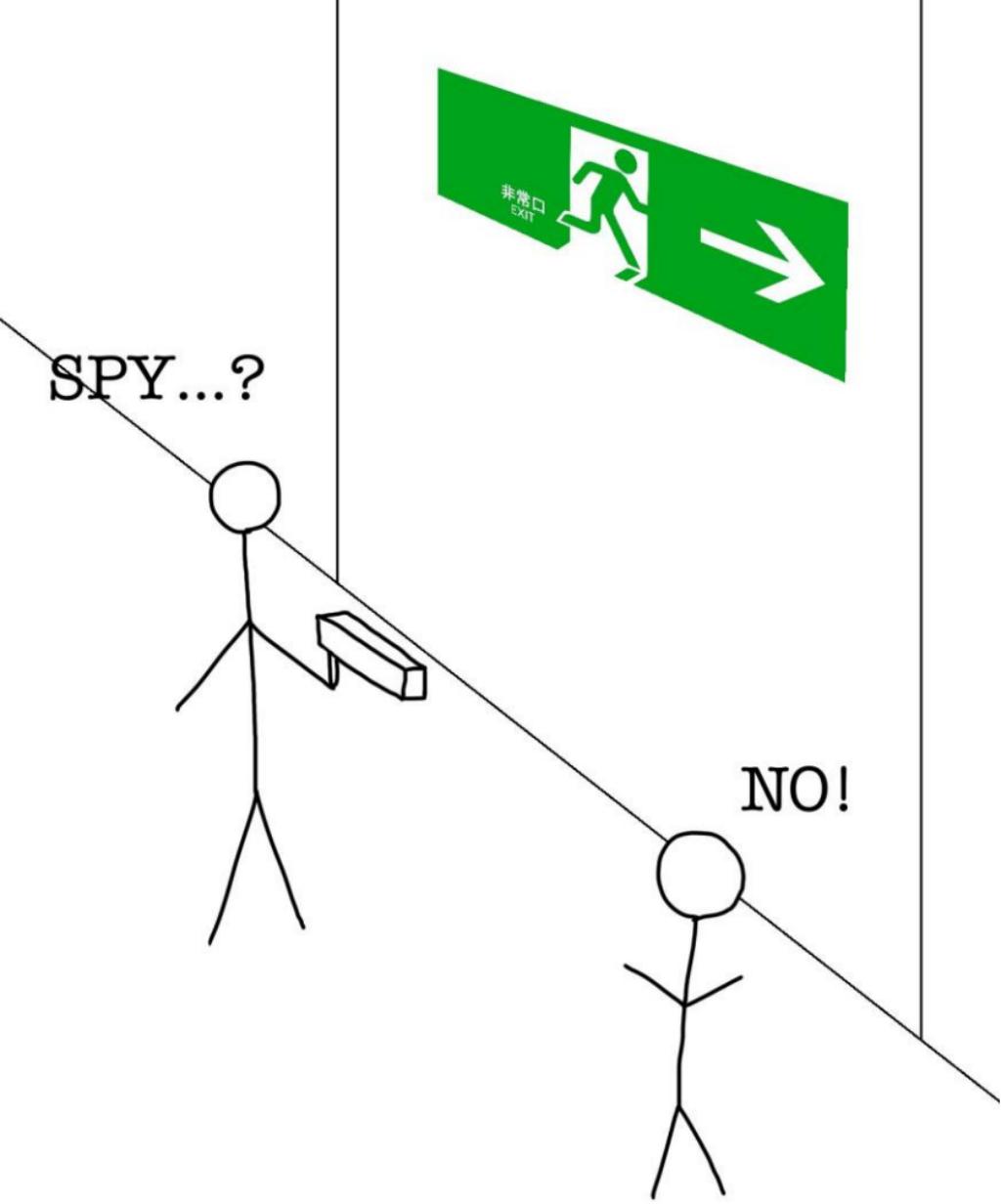
「あれ？ もしかして、地雷踏んじやつた？」

「あなた……もしかしてスペイ？」

「す、スペイ？ そんな訳ないじゃないですか……なんかそういうデータあるんですか？」

「問答無用！ 少しでもクジヤク君を信じた私が馬鹿だつたわ」

「まずい……撃たれる！ 殺される！」



*イメージ図

「……」

「……」

両者に緊張が走る。

「……なんてね！」

えつ……

「大丈夫！ 私はクジャク君を撃つたりなんかしないよ！」

「……よ、良かつた……」

「それにしても、何で霞田の名を？ ROOTの職員は、誰も霞田の名を知らないはずよ？」
まあ、気づかれちゃったみたいだから、咲希先輩には本当の事を言うか……

「実は、俺はスパイなんですよ……」

「本当にスパイなんだ。それで、霞田の首を狙つて？」

「ってか、何で咲希先輩は霞田の名前を知ってるんだ？」
ROOTの職員は、誰も霞田の名を知らないって、自分で言つてた……あ、もしかして！
「もしかして——」

「——私もスパイよ！」

まさか、同じ組織にスパイが2人もいるとは……

「私の本当の名前はジャックと言います。霞田と条約を結ばせるために、霞田に接近してるんで

す」

「そうなのね……なら私も協力するわ！」

「ほ、本当ですか!?」

ROOT の中で協力者が増えた…… !?

とっても心強い仲間だ！

「じゃあ、早速お願ひしてもいいですか？」 霞田と1対1で会話がしたいんです

「ええ。同志として協力するわ！」

やつた！

これなら、作戦が相当楽に進みそうだ！

Chapter2 實行編

「ぐ…………私と話したいと語ったのは君か？ クジヤク君？」

「なんか、作戦実行まですっごく滑らかにいったな……」

「はい。専務取締役になつたので、是非代表取締役社長の方とお話ししたいと思いまして

…………えっと、お名前は……？」

「申し訳ないが、私は ROOT 職員には自分の名前は言わないスタイルなんだ。まじめっぽくて
申し訳ないね」

もしここで「霞田」なんて言つたら、殺されてしまう。

それにも関わらず、いは廣いな……。代表取締役室と言つたつけ？ 2人きりで話すにしては、
相當広い。

「そ、そ、うなんですね……」

「変なマイポリシーでごめんね…………けどさ、」

「はい？ どうかしました？」

霞田はじっとこちらを見ている。

「…………僕の名前は知っているんだろう？」

【ジャック君】

何つ！？

気づかれていた！？

ええい！ やけくそだ！

俺は霞田の首元に刃物を当てる。

「霞田、気づいてたんだな……」

「その程度の騙しが私に通用するとでも思っていたのか？」

霞田は驚いた様子などは見せない。

凜然としている。

「条約を結ばないか？ 霞田」

「それは…………私に対する脅しかい？」

霞田は全く動じない。

「ああ、脅しだ」

霞田はどうするんだ……？

「仕方ない……」

おっ、以外にも簡単に結ばせてくれそうだ。

「仕方ない……………真実を見せてやろう」

15 「火蓋」

Chapter1 計画通り

「既に、各国に展開されているROOTの部隊に対し、日本に総攻撃を仕掛けるように伝達してある。君の計画は失敗に終わったんだよ」「なら……お前を殺す！」

俺は首元に当てていた刃物を刺し、霞田の首を切る。

…………違う。

「えっ！　み、身代わりの術！？」

刃物は木に刺さっていた。

「い、生きる木！？」

…………ではないか。普通の木か。

霞田は忍者なのか？　なんで身代わりの術が出来るんだ……？

「そ、そんなことより！　日本に帰らなきや！」

さつき、日本に総攻撃がなんとかって言つてた気がする。とりあえず日本に帰らなきや。

日本が壊滅しちゃうかもしない。

@日本

「生きる木！みんな！大丈夫！？」

「う、うん……なんとか薔薇っちが、日本を覆うドーム型のシールドで防御してるから、とりあえずね……」

「でも、このシールドは、1週間だけしか守れねえ。それ以上の攻撃は防げねえ」

1週間……

「とりあえず、ROOTの奴らをぶつ飛ばせる可能性があるのが、攻撃と攻撃の衝撃波だ」

薔薇っちが解説を始める。

「まず、1週間の攻撃は守れる。ちょうど1週間だ。1週間後、シールドが壊れた瞬間に、ROOTの攻撃に当てるよう、こっちから大きな攻撃……たとえば、ミサイルとか……を仕掛ける。ROOTの攻撃にちょうど当たれば、攻撃と剛撃による衝撃波が生まれる。その衝撃波が俺らを救う唯一の道だ」

ってことは、助かるかもしれないってことなのかな……？

「その、衝撃波を生めば、何とかなるの？」

「まあ、そうだ。けど、それは一か八か。衝撃波を抑制できなければ、生物はみんな消える」
「……消えるってことは……」

「……死ぬって事だ」

成功すれば、味方はみんな助かる。

失敗すれば、味方もろともみんな死んでしまは。

「その衝撃波に賭けよう。それしかないんでしょ」

それしかないと。

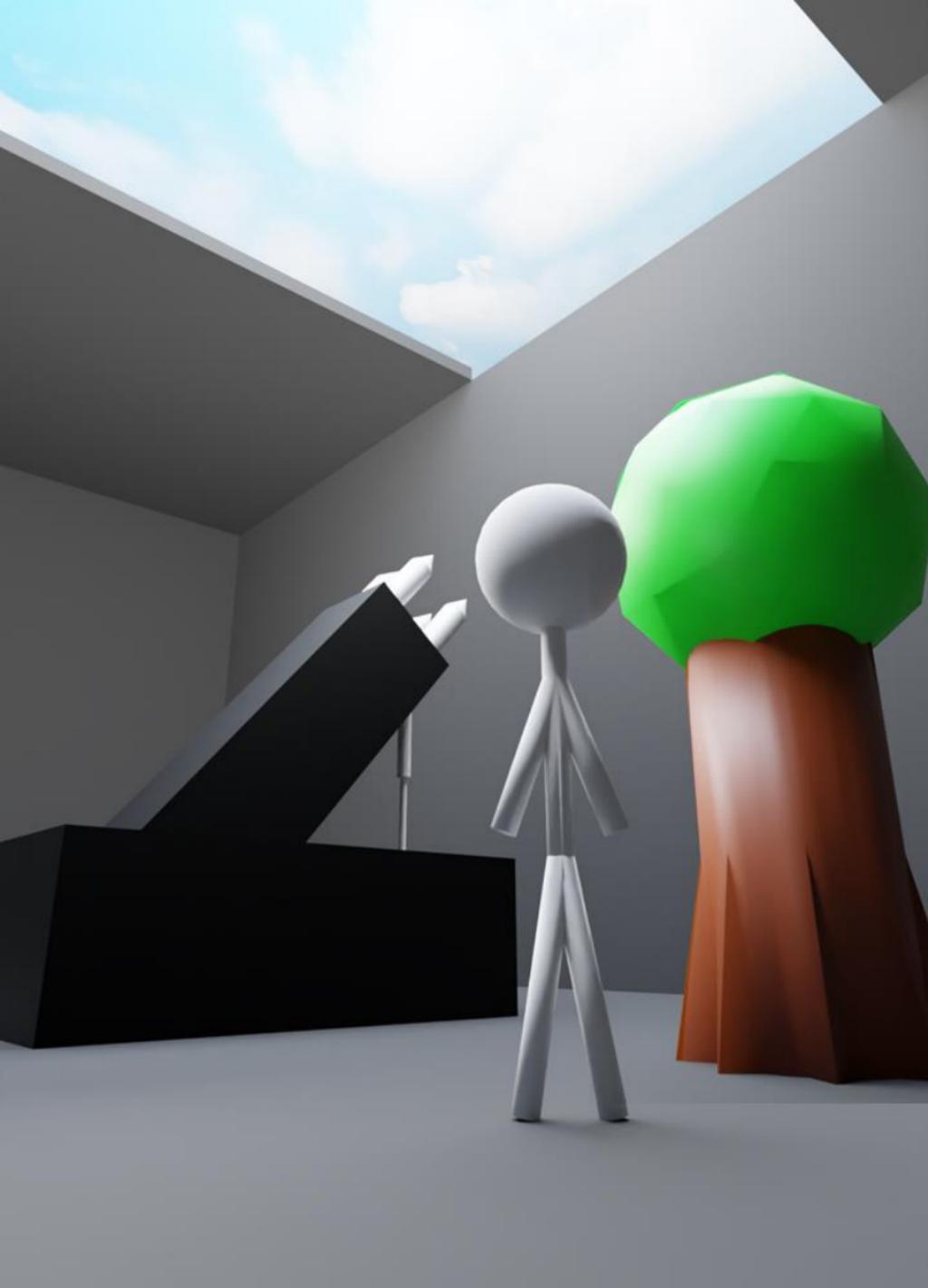
じゃないと、本当にみんな死んでしまは。

Chapter2 翼力

「第三格納庫、確認完了ですー。」

なんか、1週間の間に凄いことになつたな……

「生や木？ これは……何？」



「これは、この国を守るための、古来からの武器だよ……」

「これが……」

これが、ミサイル……？

初めて見た……

「これで、日本は守れるの？」

「ミサイルを格納して居る格納庫が全部で 13 個あるんだ。格納庫 1 個につきミサイル 4 本だから、全部で 52 本のミサイル。これだけあれば、衝撃波ぐらい簡単に起こせるよ！」

「これなら衝撃波を起こして、ROOT の奴らを倒せるかな……？」

「え、これを 1 週間の間に用意したんだよね？ やっぱり生きる木達は凄いね……」

「ミサイルだけじゃないよ！ 沢山の武器を用意したよ！」

植物科って、何でもできちゃうから、ある意味危ない組織だよね……

Chapter3 サイボーグ！

「…………どうりど、僕たちをサイボーグにして——」

「——無理だ」

「え——」

生きる木がひまわりたんに「植物科のメンバーを全員をサイボーグにする計画書（仮）」を提出

して、1時間ぐらいたっぷり熱心に解説をしていた。

途中、「サイボーグとかって男の夢じゃない!?」とか言つてたけど、木に性別つてあるのか……?

まあ、結局断られてるけど……

「なんでだめなの!? 植物科の皆をサイボーグにすれば、ROOTにだって勝てるよ!」

「うーん……………単純に考えて相当な費用とかが掛かるし…………」

「あ、費用面なら大乗だよ! 政府が協力してるから、お金はほぼ無限に出せるから!」

「そっか……………じゃあ費用面で問題がないなら、植物科の皆をサイボーグ…………植物と機械のハーフにしようか!」

「やつた～～～!!」

「植物と機械のハーフ」つてことは、俺と愛美は大丈夫そうだな。

「別に、ジャックをサイボーグにしてもいいんだよ?」

「!……………また心読んだな!?」

生きる木達が研究室に入つてから3時間が経ち、生きる木達がやつと出てきた。

Chapter4 出席

「あ、生きる木! おかえり! ……あれ? 見た目は変わってないんだね」

「うん! 即席のサイボーグだから、頭脳がインターネットにつながつただけだよ」

即席にしてはとんでもない改造してるな……

「これが案外便利でね……頭の中で誰にも邪魔されずに MeTube が見れるんだよ!」

まーたしょもしないことに使って……

「じゃあ、明日は会議があるし、もう寝るね。おやすみジャック! 改造受けてすぐ眠れるか普通!?

Chapter3 決死の決戦?

「みんな! 集まつて!」

生きる木が植物科の皆さんに声をかける。

植物科のメンバーが第8会議室に集まる。

……あれ、なんか知らない人もいる?

「さ! 決戦だよ! ひまわりたん、作戦を伝えて!」

「分かったよ。えーっと今日はお集まりいただきありがとうございます」

どうやらこの会議には日本政府や管理界の人達もいるみたいだ。

「今日の決戦では、爆発……つまり、衝撃波を起こして ROOT を倒す」

もう、ここまで来たらやるしかない。

後戻りすることはできない。

「いこう。やり切ろう」

「お、ジャックが乗り気だ！」

まあ、やるしかないからね。

「じゃ、行こうか。時間はないよ！ 指揮係はコマンドルームへ！ 急いでー！」
…………始まる…………

6 ～決戦～ Chapter1 Pre

俺と生きる木は指令本部で実際に指令を出す係になつた。

……まあ、指令と言つても特にやることはないが……。

「で、ジャックにはここから皆に指令を出してもらうよ。具体的には……制御室にいるひまわりさんに、攻撃の合図を送つたり、ミサイルの発射ボタンを押すだけなんだけどね……」「楽な仕事で助かるよ……」

「仕事は楽だけど、かなり緊張するな……」「ジャック……？ 緊張してる？」

「そりやそ、うだよ。こんなのは初めてだし……」
「安心して、ジャック。僕がついてるからー！」

生める木……！」

「う…………うん。俺、頑張るよー！」

俺なら…………きっと大丈夫。

……やり切って見せる。

Chapter2 Signal

今日の空は静かだ。

澄んだ青空。こんな景色を見るのは久しぶりだ。
思えば、ここ数日は大体攻撃の嵐だった。
その所為で、空には常に煙が舞っていた。
……でも、そんな景色とはもうお別れだ。
「ジャック！ 敵の信号を検知したよ！」
ついに始まる……！

「予想通り、ROOTは空から来てる。作戦通り、1本だけミサイルを撃つたら、ひまわりたん達に攻撃開始の合図を送るよ」

「うん。……えっと、どのボタンを押せばいいのかな」
目の前にあるのはモニターが3台だけ。

キーボードとかボタンとかがあるわけではない。

「あ！ ボタン付けるの忘れてた！ 即席の指令本部だか
ら、モニターだけしかつけてないんだった……」

生きる木は焦っている。

「とりあえずスマホ出来るはずだから、やっちゃんね
「まじ!? ジャック天才じゃん！」

スマホでも出来るようにしたのはひまわりたんなんだけ
どね……

「じゃ、ミサイル……発射！」

ボタンをタッチした。

特に揺れたりはしない。

本当に発射されたのかな？

「じゃあそのままの流れで、ひまわりたんに攻撃開始の合
図を送つてあげて！」

「了解！」

2個目のボタンをタッチする。

同時に放送が流れる。

ひまわりたんの話だと、全国の保護シェルター内のスピ



一ヵ一からも放送されるらしい。

もう、みんなシェルター内に逃げたかな?

「植物科よりお知らせいたします……現時刻より、植物科は ROOT の攻撃を開始します
……」

よしよし、順調に進んでるっぽいな…………あんま実感ないけど……

Chapter3 バックドア

「つてかさ、サイボーグ手術受けて、頭脳がインターねツトに繋がつてるんだしょ? だつた
、遠隔で〃サイル発射とか出来たんじゃないの?」

「あ、確かに発射できたかも……ちよつと PLANTS NETWORK へのペー〃シ〃マ ハ カ、ひえない
かひまわりたんに聞いてみるね」

「ふ、ふらんつねつとわーく…………。ぱーみーしょん…………。」

「PLANTS NETWORK つて言つのは、〃サイルとか攻撃開始の合図とか……今回の作戦にかかる
プロограмが組み込まれたネットワークサーバーだよ。ペー〃シ〃マ ハ カ、ひまわりたんはア
クセス権限の事…………うん! ひまわりたんが許可下ろしてくれたよー」

その説明の方が余計に分かりにくいいな……

「じゃあこれで一々スマホを使わなくていい〃サイルが発射でき…………」

「ん？ 生きる木？ どうしたの？」

「え……どうして……なんでミサイルが全部発射されたの！？」

それは一体……どういう意味？

「PLANTS NETWORK…………えっと、つまりは植物科がハッキングされたんだ」

～つづく～

おまけ

・編集後記

元のストーリーからだいぶ逸れてなんかよく分かんない物語になっちゃいました。
あー誰かが宣伝してくれて、有名にでもなったらいんだけどなー。

・次回予告

「Jack and a living tree 2.20 + 0.01」

「ヤックと生きる木 前夜祭

2.20 ~ 2.30 を繋げたために大切な架け橋となる「+ 0.01」。
あ、ちなみに 10 ページの予定です……。(ああ怒らないで… 質問のやめて… ページ数が少なくて別にこう
やっしゃ… ジたハー)